

春日版『五部大乘経』の底本とされた宋版一切経(一)

―刻記の比較による検討―

佐々木 勇

(受理日二〇一五年十月五日)

一、春日版『五部大乘経』の底本に関する先行研究と 本稿の目的

1. 先行研究

大屋徳城「春日板雕造攷」(一九四〇年、便利堂)は、「刊経はもと京洛の摺供養に始ると雖も、鎌倉以後、春日板を中心として、其影響を四方に及ぼせり。されば、我が刊経史は鎌倉を通じて、春日板を以て源流とし、中心とすといふも、何人か之を否定せんや。」と云い、

摺供養並に春日板に於ける宋槧の影響は、其様式の上なり、装幀の上に於いては、之を指摘することを得ず。即ち此等本邦の摺経は書風和様にして、幽婉なる王朝の傾向を反映し、多くは宋槧の影響を見ず。即ち寧樂朝以来継承し來れる写経の余韻を存す。又、其の装潢に於いても、前期以来の卷子の形式を踏襲し、数百年の伝統を保存す。然れども、咸通九年の金剛般若経と、寛治二年の成唯識論とを対照する時は、其刻法に於いて、一脈の相通するものがあるが如し。これを唐宋刊経の春日板に及ぼせる微かなる影響と称するも不可なる可き歟。

(大屋徳城著作選集9『佛教古板経の研究』二三三頁。)

として、他版本と比較して、春日版に宋版の影響が少ないことを説いた。

また、大屋は、春日版板木を閲覧し、その雕造日刻記を紹介した。

興福寺に在りては、此の時代の末葉に、華嚴経の摸板雕造は擧あり。同

寺現存の摸板を検するに、陰刻の銘ありて、明に紀年の残れるもの四枚あり。(略)而して、其の版式は勿論春日版に属す。今陰刻の銘を左に録す可し。

(華嚴経三帙六ノ三) 元亨三年十一月十一日

(華嚴経五帙七ノ二) 元亨三年十二月廿二日

(華嚴経五帙八ノ二) 元亨四年五月五日重舜

(参考) 南北朝時代

(華嚴経後分下ノ四) 建武元年十二月十一日

而して、斯は單獨に華嚴経の開版に非ず。此の頃流行せし五部大乘経の一としての開版なること明かなり。之れ斯経が興福寺に於いて開版せらるゝを得し所以なり。

(大屋徳城『寧樂刊経史』(一九二三年、内外出版)一九九頁。)

この鎌倉時代末の「華嚴経の摸板雕造」は、「版式は勿論春日版に属す」といふ。

しかし、現在では、この春日版五部大乘経は、宋版を「覆刻した」ものとされている。

川瀬一馬「古写経と古版経」(『大東急記念文庫貴重書解題仏書之部』(一九五六年、大東急記念文庫)所収)は、「南北朝」の項で、「五部大乘経は、鎌倉時代から信仰するものが多く、その末期には南都版系統の開版にも、宋版を覆刻した一本が現はれた程で、この時代にも武州立川の普濟寺で光信尼

が春日版の覆刻風のものを開版してゐる。」とし、同氏「樹下神社蔵佐々木崇永開版の般若若經 附、同藏春日版五部大乘經ほか」(「かがみ」第二十号、一九七六年三月)では、樹下神社に佐々木崇永開版般若若經とともに伝わる鎌倉時代後半頃開版の法華經を除く五部大乘經が、宋版覆刻の春日版であることを述べている。

その後、覆宋版五部大乘經に基づいた宋版一切經がいずれの版であったかについて、個別の検討が加えられた。

A. 『大般涅槃經』

白石克「覆宋版『五部大乘經』類と宋版との関係について(一) 大般涅槃經四十卷」(『書誌学』復刊新24・25合併号、一九七四年七月)は、覆宋版『大般涅槃經』諸本(『金澤文庫本』慶応本、東急本、真福寺本)の底本は、「刻記から見て」東禅寺版の「淳熙以降淳祐前に印行された補刻本」であることを指摘した。

B. 『大方広仏華嚴經』

白石克「覆宋版『五部大乘經』類と宋版との関係について(二) —『大方広仏華嚴經』六〇卷(東晉佛跋陀羅譯)諸版に於ける巻首品目の異同について」(『書誌学』復刊新26・27合併号、一九八一年五月)は、覆宋版『大方広仏華嚴經』(東晉佛跋陀羅譯・六十巻本)諸本を調査し、いずれも思溪版に基づくことと、巻首品目から、覆宋版『大方広仏華嚴經』が二種に分けられることを指摘した。

また、白石第一論文は、「覆宋版『五部大乘經』類と宋版との関係」を、左のように要約する。

「大方等大集經」及び「日藏經」では、思溪版の覆刻版一種、「月藏經」では、思溪版の覆刻版と元版に類似するかと思はれる版の二種、「摩訶般若經」では思溪版の覆刻版一種、「大般涅槃經」では、福州東禅寺版の覆刻版一種、「同後分」は東禅寺版に内容の(版式もや、)類似する版とテキスト版式共に、それとは異つて大正藏所収の底本や參校本とは一致しない版の二種、「菩薩瓔珞本業經」では東禅寺版に類似した版と思溪版の覆刻版の二種が存することがわかった。しかしながら、「妙法蓮華經」については、さうした「五部大乘經」の残巻と思はれる覆宋版を未だ閲覧していない。

右の白石論文は、金澤文庫・慶応大学図書館・大東急記念文庫・真福寺蔵

の、春日版五部大乘經を含む覆宋版を一括に論じたものである。残存帖は各所様々で、雕版・印刷時も一定しない。そのため、春日版に限定した場合の底本が判然としない。

さらにその後、大山仁快は、「鎌倉時代には一方で刊經が盛んになる。同時代末期には奈良興福寺で、宋(思溪)版一切經の中の五部大乘經を模刻して刊本が作られたとみえ、興福寺に現にその版木が残り、その印本とみられる刊經が京都府下の京北町常照寺、丹波町大福光寺、日吉町淨欣寺・普門寺などにそれぞれままとまって残っている。」と述べた。しかし、鎌倉末期に思溪版模刻五部大乘經が興福寺で刊行されたことは、この時点では推測の域を出ない。

近年、山本信吉『古典籍が語る —書物の文化史—』(二〇〇四年、八木書店)は、春日版の中に、宋版を模したものが存することを、興福寺現存の板木に基づいて具体的に指摘した。³⁾

鎌倉時代は我が国に数多くの宋版本が将来され、学問・文化に多大の影響を与えている。印刷文化の上でも叡尊の西大寺版のように明らかに宋版を規範とした版本もあるが、春日版にはその影響は見受けられない。ただ、現存する板木でみると鎌倉時代末から南北朝期にかけて雕造された「五部大乘經」、すなわち前掲の表でいえば9から12に至る『摩訶般若波羅蜜經(大品般若經)』『大方広仏華嚴經』『大般涅槃經』『大方等大集經(日藏經・月藏經を含む)』は明らかに宋版を模したものである。本文は折本の半折六行の姿を取り入れて、その書体は宋版の字体を模した活字体に近く、かつ本文の行間に版心(略経名・巻次など)を刻記している。

2. 本稿の目的

鎌倉時代後期彫造春日版五部大乘經に、宋版の影響を強く受けた經が存することは、右に引用した先行研究によって明らかにされた。

しかし、鎌倉時代後期彫造春日版五部大乘經のすべてが宋版に基づくのか、宋版一切經に依る場合どの宋版を基としたのかは、いまだ明確ではない。本稿は、この春日版「五部大乘經」の依拠本をより明解にすることを目的とする。

二、本稿の対象資料と研究方法

1. 対象資料

鎌倉時代後期以降の古文書に、「供養謹命合山比丘衆、看閱五部大乘経二百卷」（建長寺文書）元弘三年（一一三三）月日、「光明真言五十七遍、看閱五部大乘経一部二百卷」（鹿王院文書）貞治三年（一一三六）九月十二日）などが見え、鎌倉時代後期の五部大乘経は、一部二〇〇巻が主流であった。⁴⁾ その、鎌倉後期刊刻春日版五部大乘経における二〇〇巻の内訳は、左の通りである。

『大方広仏華嚴経』六十巻・『梵網経』二巻。

『大方等大集経』三十巻・『日藏経』十巻・『月藏経』十巻・『菩薩瓔珞本業経』二巻。

『摩訶般若波羅蜜経』三十巻・『仁王般若波羅蜜経』二巻。

『大般涅槃経』四十巻・『大般涅槃経後分』二巻・『仏垂般涅槃略説教誡経』

一巻・『像法決疑経』一巻。

『妙法蓮華経』八巻・『無量義経』一巻・『観普賢経』一巻。

春日版五部大乘経の底本を明らかにするため、鎌倉時代後期雕造時に近い春日版五部大乘経の遺品が必要である。

本稿の目的のために、左二部の春日版五部大乘経を調査した。

① 愛媛県砥部市光明寺蔵本

愛媛県砥部市光明寺蔵本は、現在、愛媛県歴史文化博物館に寄託されている。寄託先である愛媛県歴史文化博物館のご厚意で、原本を調査することができた。⁵⁾ 本経を所蔵する光明寺ならびに愛媛県歴史文化博物館・土居聡朋学芸員に深甚の謝意を表する次第である。⁶⁾

愛媛県歴史文化博物館展示解説には、「鎌倉時代後期」「この資料の大部分は、奈良興福寺により春日版板木（現存板木は国重要文化財）として開版・印刷された可能性が高い。」と有る。この解説は、当時館長であった山本信吉氏指導の下、書かれた。なお、この光明寺蔵本では、次の諸帖が欠巻となっている。

『大方等大集経』巻第三・日藏経巻第五・『大方広仏華嚴経』巻第

二十五・四十四・五十二・『大般涅槃経』巻第一・五・二十五・『梵網経』二巻・

『仁王般若波羅蜜経』二巻・『像法決疑経』一巻・『妙法蓮華経』八巻。

その他にも欠損の帖が存するものの、全体として良く整理・保管されている。

② 滋賀県北小松樹下神社蔵本

樹下神社蔵五部大乘経は、右に引用した川瀬論文に記されるとおり、「奉納十禪師社頭近江國志賀郡比良本庄小松貞治五年丙午卯月十九日願主作阿供養導師是觀上人」あるいは「奉納十禪師社頭近江國志賀郡比良本庄小松願主尼作阿貞治五年丙午卯月十九日」と各帖上欄に横書き墨書されている。『摩訶般若波羅蜜経』巻第二十一・三十と『月藏経』巻第十のみを欠き、全一八九帖を今に伝える。⁷⁾

右二本は、同版である。ただし、①光明寺蔵本の方が刷りが早く、文字が鮮明である。開版後まもなく、鎌倉後期に印刷されたものである。②樹下神社蔵本は、上欄書き入れの通り、貞治五年（一一三六）に摺写された、と考えられる。この①②の二本を合わせれば、鎌倉後期刊刻春日版五部大乘経全二〇〇巻の全貌を知ることができる。

本稿では、①光明寺蔵春日版五部大乘経を主資料とし、光明寺蔵本での欠帖・欠損箇所を②樹下神社蔵本によって補うこととする。以下、本稿中で「春日版五部大乘経」と記した場合は、この両本を指す。

右の鎌倉後期春日版五部大乘経のうち、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』は、宋版の書式を引き継がない。日本の伝統を承け全八巻仕立てとし、全七巻の宋版書式を採用しない。字形も書写体であり、宋版を模した版心記も存しない。『妙法蓮華経』の開結経である『無量義経』『観普賢経』も、同様である。

また、『像法決疑経』は、偽経・疑経との判断から宋版一切経に入蔵されなかったため、『法華経』同様、日本の古写本に基づいて彫刻している。⁸⁾

よって、本稿では、『大方広仏華嚴経』・『梵網経』、『大方等大集経』（日藏経・月藏経を含む）・『菩薩瓔珞本業経』、『摩訶般若波羅蜜経』（大品般若経）・『仁王般若波羅蜜経』、『大般涅槃経』・『大般涅槃経後分』・『仏垂般涅槃略説教誡経』の、四部一八九巻を対象とする。

2. 研究方法

右の鎌倉後期刊刻春日版五部大乘経と宋版一切経諸本とを、以下の観点か

ら比較する。

A. 刻工名・帖末刻板数・帖末釋音・捨錢刊記・総字数・帖末記文・帖末刊記の宋版刻記を引き継ぐか否か。宋版刻記が有る場合は、どの宋版のものか。

B. 經本文は、どの宋版のものか。

C. 釋音本文は、どの宋版のものか。

D. 宋版に基づく經に、春日版独自の点は無いか。

比較対象の宋版は、東禪寺版、東禪寺版補刻本、開元寺版、思溪版とする。磧砂版・普寧寺版は、卷首卷末千字文の下に帙内通番を刻す点など、春日版五部大乘經とは一見して異なるため、比較対象外とする。

各版本一切經の本稿依拠本は、次の通りである。

東禪寺版―醍醐寺藏本、東禪寺版補刻本―書陵部藏本、開元寺版―知恩院藏本・書陵部藏本、思溪版―増上寺藏本・岩屋寺藏本・長瀧寺藏本。

原本または写真閲覧を御許可下さった所蔵者各位、並びに国際仏教学大学院大学日本古写經研究所に、心から御礼を申しあげる。

なお、紙幅制限のため、本稿では、Aの春日版に見られる宋版刻記からの底本推定結果を述べ、B. 本文比較からの底本推定結果は本紀要次号に、観点C Dからの検討結果は本紀要次号に掲載する。

三、刻記の比較による底本の検討

1. 『大般涅槃經』

○刻工名

春日版『大般涅槃經』（曇無讖譯・北本）には、次の刻工名が存する。

王青（卷第六第八板柱刻）・太刀（卷第十第十二板柱刻）・溢（卷第十一第十一板柱刻）・文（卷第二十一第九板柱刻）・中（卷第二十一帖末）・采（卷第二十二帖末）・賜（卷第二十三第七板柱刻）。

右はすべて、東禪寺版『大般涅槃經』同巻同紙の柱刻に見られる刻工名である。

○帖末刻板数

春日版『大般涅槃經』は、左の帖末刻板数を記す。

十五（卷第三帖末）・十五紙（卷第十二帖末）・十四（卷第十五帖末）。

十三紙（卷第十七帖末）・十四尾（卷第二十一帖末）・十四止（卷第三十二帖末）・十六紙（卷第三十六帖末）・十五昏尾（卷第三十七帖末）。右はすべて、東禪寺版『大般涅槃經』の同巻帖末に刻された帖末刻板数である。

なお、春日版は、他の日本版本同様、紙を継いだ後に印刷しているため、右の紙数は、春日版における実際の紙数とは異なる。それにもかかわらず、元とした宋版の刻記のままに彫ったものである。他經に引用された帖末刻板数も、同様である。

○帖末刊記

春日版『大般涅槃經』卷第二帖末には、「住持傳法慧空大師」の刊記が彫られている。これは、東禪寺版『大般涅槃經』卷第二卷末刊記「住持傳法慧空大師 冲真」の部分に刻したものである。

○捨錢刊記

春日版『大般涅槃經』卷第六卷首には、「汀州富民庵主定如捨一片」という捨錢刊記が附刻されている。

この捨錢刊記は、白石論文に指摘のとおり、東禪寺版『大般涅槃經』卷第六卷首にも見られる。それは、東禪寺版補刻本（書陵部藏本）に存し、それより古い版の醍醐寺藏東禪寺版には存しない。なお、醍醐寺藏東禪寺版には、全帖を通じて、「定如」の捨錢刊記は無い。

○帖末釋音

春日版『大般涅槃經』全四十帖には、帖末釋音が一切見られない。これも、東禪寺版にそれが存しないためであろう。

これらの点から、春日版『大般涅槃經』が東禪寺版の補刻本に基づくことが知られる。

2. 『大般涅槃經後分』

ところが、『大般涅槃經後分』には刻工名が見られず、帖末刻板数「後分上 十六」「後分 下 十五」は東禪寺版と一致しない。

そして、「溺（奴迪切）」等の音注のみの帖末釋音、および、卷下に「新經後記」と「大涅槃經後序」とが刻されている。「新經後記」「大涅槃經後序」は、二十九行に及ぶ。これらは、東禪寺版・開元寺版には無く、思溪版に存する。

右の点から、春日版『大般涅槃経後分』は、思溪版を基とする可能性が高い。

3. 『大方広仏華嚴経』

○刻工名

朱五（巻第六第六板柱刻）・盧廣（巻第五十九第三板柱刻）・于（巻第五十九第十二板柱刻）。

春日版『大方広仏華嚴経』は、右の思溪版刻工名を引用する。

○帖末刻板数

春日版『大方広仏華嚴経』は、左の通り、思溪版の帖末刻板数を多数引用する。

已上十三帙計六千九百字（第一巻帖末）・已上共十二紙計六千二百丹七字（第二巻帖末）・十七止（巻第四帖末）・十四^⑩（巻第五帖末・巻第四十七帖末）・十六紙八千二百三十二字（巻第六帖末）・十六紙計八千八百九十八字（巻第九帖末）・十五止（巻第十四帖末・巻第十九帖末）・十四止（巻第十八帖末・巻第二十一帖末）・十六（巻第三十五帖末）・十四紙（巻第三十七帖末・巻第五十一帖末・巻第五十二帖末）・十三紙（巻第三十八帖末・巻第四十二帖末・巻第五十三帖末）・十八（巻第四十六帖末）・十二紙（巻第四十八帖末）・十五紙（巻第五十帖末）・二十紙（巻第五十五帖末）・十八紙（巻第五十六帖末・巻第五十七帖末・巻第五十八帖末・巻第五十九帖末）・十七紙（巻第六十帖末）。

これらは、思溪版の帖末刻板数と一致し、東禪寺版・開元寺版のそれとは異なる。

ただし、次の巻の帖末刻板数は、思溪版のものと異なる。それぞれ、以下の理由によると考えられる。

巻第十五 十四（春日版）―古花十三帙有七千八十二字（思溪版）。

春日版の第十二板は四面、第十三板は二面、第十四板は二面であり、思溪版の十三板と異なるため、思溪版の刻記を引き継がず、追加されたものであろう。

巻第四十八 十二紙（春日版）―十三紙（思溪版）。

春日版は、第七板も六面としたため、全十二板で収まった。思溪版は、第七板を五面とするため、一面のみの第十三紙が必要となった。

巻第四十九 十（春日版）―十三紙（思溪版）。

春日版は、第十二板の柱刻が存する板に続く最終板に「十」の刻記がある。春日版の欠損または誤刻であろう。

巻第五十四 十七紙（春日版）―十八紙（思溪版）。

春日版は、一面二行のみの第十八板に「十七紙」と刻す。誤刻でなければ、第十七板に最終面の二行を刻したものかもしれない。思溪版は、第七板を五面とするため、第十八板は二面存する。

○総字数刻記

春日版『大方広仏華嚴経』は、思溪版の帖末に刻された、当該帖総字数を引用する。上記帖末刻板数に掲げた巻第一「已上十三帙計六千九百字」、巻第二「已上共十二紙計六千二百丹七字」、巻第六「十六紙八千二百三十二字」、巻第九「十六紙八千八百九十八字」がそれである。

以上から、春日版『大方広仏華嚴経』は思溪版に基づく、と考えられる。^⑪

○帖末釋音

春日版『大方広仏華嚴経』全六十帖には、帖末釋音が一切見られない。これも、思溪版にそれが存しないためである。^⑫

4. 『大方等大集経』（日藏経・月藏経を含む）

○帖末記文

春日版『大方等大集経』には、釋音の後に、次の記文が有る。

卷第十七「大集経十七卷釋音」、卷第二十二「大集経第二十二卷釋音 國」。日藏経卷第一「大乘大方等日藏経第一卷釋音」、卷第五「日藏経卷第五 釋音 虞」、卷第八「八卷釋音 虞」、卷第九「日藏経卷第九音釋」。月藏経卷第二「月藏経第二卷」、卷第七「月藏経第七卷釋音」。

思溪版にも、この春日版と同一の記文が存する。

また、春日版日藏経卷第四尾題前には、思溪版と同じく、「此卷陀羅尼字／已出在前卷了」と彫られている。

○帖末釋音

春日版『大方等大集経』は、巻第二および『月藏経』巻第三を除く全帖に、帖末釋音を有する。この点から、釋音を別帖仕立てとする東禪寺版や開元寺版ではなく、思溪版に基づいていることが知られる。^⑬

○帖末刻板数

春日版『大方等大集経』全五十巻に、宋版の帖末刻板数を刻した例は無い。

思溪版にも、帖末刻板数はまったく存しない。一方、東禪寺版・開元寺版には、帖末刻板数が見られる。

○刻工名

下(『日藏経』卷第四第一板柱刻)

春日版『大方等大集経』全五十帖中に、刻工名らしきものはこの一例のみである。

しかし、思溪版当該帖にこの字は見えず、思溪版全体の刻工名にも、「下」は存しない¹⁵。通常の刻工名を記す位置に存するものの、「下」は、刻工名ではないのかもしれない。

以上の諸点から、春日版『大方等大集経』の底本は思溪版である、と考えられる¹⁶。

5. 『摩訶般若波羅蜜経』

○刻工名

藤民(卷第二十八第十二板柱刻)・楊茂(卷第十一卷末釋音の後)。

この刻工名は、思溪版『摩訶般若波羅蜜経』当該卷の当該箇所に見られるものと等しい。

○帖末刻板数

二十一紙(卷第六帖末)・十七紙(卷第七帖末)・二十三紙(卷第八帖末)。

右の帖末刻板数は、思溪版と完全に一致し、東禪寺版・開元寺版・磧砂版・普寧寺版とは一致しない。

○帖末釋音

春日版『摩訶般若波羅蜜経』には、次の卷に帖末釋音が存する。

卷第十・十一・十三・二十三・二十五・二十七・三十の十六卷。

卷第一・九・十二・二十四には、釋音が無い。なお、卷第二十四の帖末には、「不出字音」と刻されている¹⁷。

思溪版『摩訶般若波羅蜜経』も、春日版と同じ卷々に帖末釋音が有り、春日版にそれが無い卷には無い。また、卷第二十四帖末に「不出字音」と刻されることも、春日版と等しい¹⁸。

6. 『梵網経』

春日版『梵網経』卷下帖末には、釋音が存する。この帖末釋音は、思溪版

の釋音と全同である。

しかし、これのみを根拠として、思溪版に基づくとは断定できない。底本の推定は、続稿の本文比較によって行なう。

7. 『菩薩瓔珞本業経』『仁王般若波羅蜜経』『仏垂般涅槃略説教誡経』

この三経は、以上に記してきた宋版の刻記が見出せず、刻記からは底本の手がかりが得られない。

しかし、宋版の字形であり、版心記も有する。続稿の本文対照によって、底本を特定したい。

四、小結

本稿の目的は、鎌倉後期に開版された春日版「五部大乘経」の底本宋版を特定することであった。

その目的達成のため、次の方法を採った。

1. 春日版に見られる刻工名等の刻記を抽出し、それらを宋版一切経諸本の刻記と比較する。

2. 春日版の経本文を、宋版一切経諸本と比較する。(結果は、次号。)

3. 春日版の帖末釋音を、宋版一切経諸本と比較する。(結果は、次々号。)

宋版刻記による検討の範囲では、春日版「五部大乘経」の底本は、次の宋版一切経である。

『大般涅槃経』—東禪寺版補刻本。

『大般涅槃経後分』『大方広仏華嚴経』『大方等大集経(日藏経・月藏経を含む)』『摩訶般若波羅蜜経』—思溪版。

右は、次号・次々に掲載予定の経本文・帖末釋音による底本推定結果に等しい。

興福寺には、現在も宋版一切経思溪版を中心とする宋版五三四帖(磧砂版・祥符寺版を混合)が所蔵され、国の重要文化財に指定されている。その思溪版が、春日版の主たる底本であったことは、首肯できる。

しかし、鎌倉後期開版春日版「五部大乘経」は、宋版の単なる覆刻本ではない。独自の改変も加えられている。この点については、本紀要次号掲載予

定の続稿で述べる。
次に問われるべきは、宋版一切経の内、底本としてなぜ思溪版が採用されたのか、『大般涅槃経』はなぜ東禪寺版補刻本を採用したのか、である。これについても、別稿を準備中である。

【注】

- (1) 同書一六四頁で大屋は、春日版『摩訶般若波羅蜜経（小品般若経）』に存する元亨・正中の陰刻銘を紹介し、五部大乘経の一としての開版であるうことを述べている。
- (2) 「五部大乘経研究余録」（『日本歴史』四六六号、一九八七年三月）。
- (3) 山本信吉『古典籍が語る―書物の文化史―』（二〇〇四年、八木書店）226頁。
- (4) 五部大乘経の歴史については、別稿で述べる。
- (5) 本経全体の書誌・伝来等については、土居聡朋「愛媛県伊予郡砥部町光明寺所蔵・版本五部大乘経について ―元版覆刻和版五部大乘経の一事例として―」（『愛媛県歴史文化博物館 研究紀要』第十二号、二〇〇七年三月）に詳しい。
- (6) この調査には、国際仏教学大学院大学の特別研究員上杉智英氏・同前島信也氏、ならびに広島大学大学院博士課程後期大学院生の坂水貴司氏の助力を得た。記して感謝申しあげます。
- (7) 樹下神社蔵本の巻首巻末写真を、滋賀県教育委員会の井上優氏から御貸与いただき、その後、大津市教育委員会和田光生氏のご紹介により、原本閲覧の機会を得た。樹下神社の平野修保宮司・川端陽太郎責任役員代表はじめ役員の皆様に、大変お世話になった。記して御礼申しあげる。なお、この調査でも、国際仏教学大学院大学の特別研究員上杉智英氏・同前島信也氏、知恩院浄土宗学研究所の南宏信氏、大東急記念文庫の村木敬子氏、比治山大学常勤講師の刀田絵美子氏、ならびに広島大学大学院博士課程後期大学院生の申智娟氏・坂水貴司氏にご助力いただいた。
- (8) 春日版五部大乘経中の『像法決疑経』については、別稿を準備中である。
- (9) ただし、春日版の誤刻と判断される、下の相違がある。（思溪版―春日版として、出現順に記す）懐―慢、龍朔―龍策、遂―遠、永―水。
- (10) この春日版巻第五は国立国会図書館にも所蔵され、全頁カラー画像が

公開されており、帖末刻板数「十四」を確認できる。

- (11) 佐々木勇「宋版一切経東禪寺版に五面の一紙が挿入された理由」（『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部、文化教育開発関連領域」63号（二〇一四年十二月）、参照。
- (12) 佛陀羅等譯・六十卷本『大方広仏華嚴経』（旧訳）を、東禪寺版・開元寺版は五十巻、思溪版・磧砂版・普寧寺版は六十巻とする。春日版五部大乘経は、これを六十巻としているため、思溪版・磧砂版あるいは普寧寺版に基づくことが知られる。また、思溪版・磧砂版・普寧寺版は、この旧訳華嚴経を一函一帙に十二巻を収める。それによって、一函に十巻を所収する東禪寺版・開元寺版と同じく、105坐―109垂に収まっている。したがって、旧訳華嚴経第一函は、巻第一―第十二までに千字文105坐が振られることとなる。東禪寺版・開元寺版の『華嚴経』第十一巻・第十二巻は、106朝に分属されている。春日版五部大乘経旧訳『華嚴経』は、思溪版・磧砂版・普寧寺版同様、十二巻ごとに千字文を割り振っている。
- (13) 帖末釋音を付すことを原則とする思溪版本において、『大方広仏華嚴経』全六十巻になぜ釋音が見られないのかは、別に検討すべき課題である。
- (14) 春日版巻第二に釋音が無いのは、思溪版巻第二が「不出字音」として釋音を掲載しないためである。しかし、思溪版『月藏経』巻第三は釋音を有する。対応する春日版『月藏経』巻第三に釋音が見られない理由は、未詳である。
- (15) 野沢佳美「宋版大藏経と刻工 ―附・宋版三天藏経刻工一覽（稿）―」（『立正大学文学部論叢』110、一九九九年九月）に依る。
- (16) なお、『大方等大集経』全三十巻は、東禪寺版・開元寺版・思溪版と普寧寺版とは、巻の分函が異なる（分函は、『増上寺史料集 別巻』（一九八一年、増上寺史料編纂所）所収『元版大藏経目録』による）。
- 東禪寺版・開元寺版・思溪版 普寧寺版
- | | | |
|------|----------|----------|
| 90位函 | 巻第一―七 | 巻第一―八 |
| 91讓函 | 巻第八―十五 | 巻第九―十六 |
| 92國函 | 巻第十六―二十二 | 巻第十七―二十三 |
| 93有函 | 巻第二十三―三十 | 巻第二十四―三十 |
- すなわち、全三十巻を、東禪寺版・開元寺版・思溪版は7巻8巻7巻8巻に分け、普寧寺版は8巻8巻7巻7巻に分ける。春日版五部大乘経は、東

禪寺版・開元寺版・思溪版の分函法に一致する。

(17) 二二六・二二八・二二九は、光明寺藏本尾欠。

(18) 一方、磧砂版では、『摩訶般若波羅蜜經』中、帖末釋音が有るのは、卷十五・十七・二十・二十三・二十六・三十の七卷のみである。そして、春日版・思溪版で「不出字音」としていた卷第二十四に釋音が存する点も、磧砂版は異なる。また、普寧寺版では、卷第一・二・六・十・十一・十三・十五・二十一・二十三・二十五・二十七・三十の十九卷に、帖末釋音が存する（『増上寺史料集別卷』「増上寺三大藏經目錄元版」に依る）。

The South Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経)
Which Became Original Text of Kasuga Prints (春日版)
the Five Volumes of Mahayana Sutras (五部大乘経) (1)
— The thing understood by comparing inscriptions —

Abstract : The Five Mahayana Sutras (Hoke-kyo (法華経), Kegon-kyo (華嚴経), Nehan-kyo (涅槃経), Daijiki-kyo (大集経), Daibon hannya-kyo (大品般若経) were printed at Kofuku-ji (興福寺) in Nara. Those were called Kasuga edition (春日版). Those were printed in the latter period in Kamakura era. The purpose of this thesis is to specify a dependence book of the Five Mahayana Sutras. The next was understood by consideration of this thesis.

1. A dependence book of "Nehan-kyo (涅槃経)" is Touzenji ban hokokuhon (東禅寺版補刻本).
2. A dependence books of Kegon-kyo (華嚴経), Daijiki-kyo (大集経) and Daibon hannya-kyo (大品般若経) are Sikei ban (思溪版).

This thesis continues after a next issue.

Key words: the South Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon, the text of Kasuga prints,
the Five Volumes of Mahayana Sutras

キーワード : 宋版一切経, 春日版, 五部大乘経